

## なくて七癖

稲宮 健一

「落ちる人が死んでからお乗りください」「このお国訛りは、中学生の頃、叔父の仙台の友人がわが家の茶の間の雑談のなかで、車掌の乗降客への呼びかけで、これを面白おかしく話していたのを覚えている。その頃、私は通学に渋谷発の都電を使っていた。やはり、混んでくると、車掌は車内に向かって降りる方を通してやって下さいと呼びかけていたし、乗客も混んでいる車内から降りる時、済みません降りますと一声かけて出口に向かって行ったものだ。

やがて、高度成長期になると、通勤電車はすし詰めが当たり前になり、乗降への案内などなく、混雑のピーク時には無理して乗る乗客を乗せないようにする「剥がしや」なる駅員が配置されるようになった。満員電車では人にぶつかっても、あまり気にしない常識の風潮を広まっていた。最近の車内案内は乗降への注意はなく、案内が多言語だったり、不審者への注意喚起が放送されるように様変わりしている。

話し変わって、小さい頃、なぜ日本は左側通行なのかと母に聞いたら、昔、お待さんが歩いているとき刀が触れると、鞆当てにござると言って争いになったので、そうならないように道の左側を通るようになったと教えられた。以前から無駄な争いを避けるように生活の知恵が働いていたように思える。

卑近な例として、出入口に繋がる狭い通路で、出口に向かおうとする時、肩が触れ合うような感じするにも拘らず、無言で無遠慮に入ってくる人がいる。もしこれが海外なら、入ってくるのをちよっと待ってくれたり、体が触れでもしたりしたら、Excuse meとか言葉が出るのが普通だ。どうも、満員電車の常識は場所が変われば非常識で通用しない。

世の中のお付き合いはまず、身近なところからお互いに相手を思いやり、しかも、どこでも通用するプロトコルでお互いに自己主張することが肝要と思う。もっとも、最近はその相手のことなど吹く風で、隣の家に勝手に闖入してくる大国があることが嘆かわしい。